

御木宏美

Illustration

史堂權



もっと

野蛮なセシフ

Yukari(由)

**Isamu
(勇)**

**Takeshi
(雄)**

**Haruka
(悠)**



**Tasuku
Kamaru(祐)
(カマル)**

**Suguru
(優)**

もつと野蛮なセレブ

《立読み版》

御木 宏美

イラスト 史堂 權

「落成式典はあさつてのはずだが、どういうつもりだ？」

上昇を開始したエレベーターのなかで雄は隣に立つ悠に尋ねた。

「いいから」

答えた悠は前を向いたままかすかに笑っている。

雄は悠の端麗な横顔を見つめた。

目線の位置はほとんど変わらない。二人とも日本人の中では長身である。雄が百八十四センチ、悠は百八十八。揃って均整のとれた体軀から、市中を歩けばどちらも見知らぬ周囲の人々から頻繁に、モデルか芸能人か、という眼差しを向けられる。

雄のほうは眉がきりつとして、眦が上がっている。知性的でシャープな顔立ちのなかに男の色気がほのかに滲む。

悠は脛がはつきりした二重で目の大きさやラインが女性的だ。かといって弱々しい感じはまったくしない。むしろ眼力は相当強い。そのアーモンド形の目にじっと見つめられたら大半の人間はたじろぐだろう。整いすぎた容貌がその迫力に拍車をかけている。目、鼻、口、眉、顎のラインなどパーツの形

とそれらの位置はけなしようがない。無造作に日焼けしたふうの肌はそばで見るととてもきめ細かく、すみずみまでグルーミングとケアが行き届いている。肩の下まで伸ばした髪は明るい茶色。そして服や靴やアクセサリーのたぐいはたいいていモード系の雑誌に掲載されているような一流のトレンドデザイナーの作品。

見慣れている雄でさえ、その艶やかな姿にはしばしば目を奪われることがある。美丈夫とは彼のために作られた言葉だと言っても過言ではないだろう。

視線に気づいた悠が振り向いた。

「なに？」

新築ビル特有の化学的な建材の臭いのなかに嗅ぎ慣れたフレグランスの官能的な香りが漂う。

雄は答えず行き先階ボタンの上にある階数の表示パネルに目を向けた。

押さえつけられるようなGがかすかにかかって上昇中の箱が減速を始めた。それにもない七色の光の滴が下から上へ流れていたパネルにデジタル数字が現れる。

六十五、六十六、六十七……。

数値が上昇していく。

七十三。

振動なく箱が停止する。

最新鋭のエレベーターは高さ二百八十四メートル、地上七十三階建て、竣工したばかりのクロカワ・インペリアル・タワービルの最上階へ、わずか八十秒で二人を運び上げた。

扉が開いた。

六メートルほど先に壁があり、大理石の大きなカウンターが鎮座していた。人の姿はない。気配もなく、物音一つしない。

雄は再び悠の顔へ眼差しを向けた。

目が合う。

悠が長い腕を伸ばして扉の脇の開ボタンを押した。そして微笑みながら、先に、と目で促す。

雄は正面に視線を戻した。

扉の向こうは照明が点いておらず、エレベーターの中からあふれる光が届かないところは暗い。

工事が完了しただけで、テナントの入居はまだ行われていない。警備員を除いてビル内は無人大。そんなところへ連れてきてなにを考えているんだ、と内心いぶかりながら、求めに従い雄はエレベーター

を降りた。悠も続く。

背後で扉が閉まった。

光源が失せてあたりは闇となった。必要最低限の非常灯は点いているが、周囲の様子がかろうじて見てとれる程度で、逆光になればもう表情も見分けられない。

その闇のなかを悠は惑うことなく左の方向に歩き始める。今度は雄があとを追った。

静寂が耳を打つ。

足元は踏み心地のいいカーペットが敷きつめられていて、二人の靴音をすべて吸収していく。

左側には乗ってきたものを合わせて四基のエレベーターが並んでいる。右は壁。明日にはそこに書画や美しい花が飾られるだろう。だが今はまだ殺風景な光景をさらしている。空気にはエレベーター内と同じく新しい建材の臭いがかすかに混じる。

向かっている先には両開きの扉があった。

悠がシャツの胸ポケットからプラスチックカードを取り出した。ドアノブの下にある、赤いLEDライトが小さく灯った挿入口にカードを差し込む。

光が緑色に変わった。

クラシックなノブを回して悠は片方のドアを引き開ける。そしてノブを握ったまま、もう一方の手で、どうぞ、と入室を促す。

雄は悠の顔に視線を向けた。

形のいい口元にやはりかすかな笑みが浮かんでいる。なにか思惑があるのだろうか、なにを考えているのかその表情からは読み取れない。

訊きいてもきつと最後まで答えないだろう。

質ただすのをやめ雄は開かれた扉をくぐった。

その先はこのビルの入居者のみが見えるクラブブラウンジだった。建物の中心を貫くエレベーターを除いてフロア全体が打ち抜かれていて、四方の窓から三百六十度の景色を望む。

時刻は夜の八時を回っていた。窓は真っ暗だ。

室内も扉の上に非常灯が灯るのみで、低いソファやテーブルが暗い静寂のなかにひっそりと眠っている。人気はもちろんない。

ラグジュアリーなインテリアの間を抜け雄は窓際へ歩み寄った。

近づくにつれ、宝石を敷き詰めたような夜景が闇の底から浮かび上がる。

ガラスの向こうには息を呑む^のような幻想的な光景が広がっていた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

もつと野蛮なセレブ

《立読み版》

発行日 2011年9月23日

著者名 御木 宏美

イラスト 史堂 權

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Hiromi Miki 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。